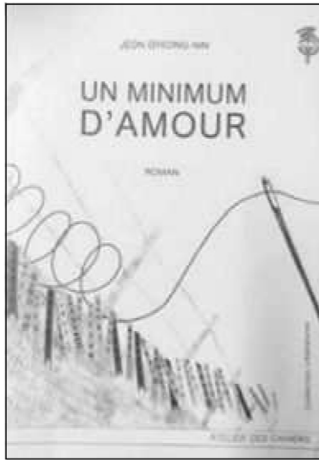


『異邦人』における生きることへの愛——翻訳の比較

ギヨーム・ジャンメール

【要旨】

幸福の探究は『異邦人』をはじめ初期のカミュ作品に顕著に見られるテーマである。本発表では、複数の言語の訳者による様々な翻訳を分析し、そこでカミュの「生きることへの愛」という考えがどのように解釈されているかを明らかにしたい。具体的には、「もつとも貧しく頑固な悦び」、愛情、小さな幸福の共有、ムルソーが悔悛のなかで見いだす最期の慰め、といった要素を分析する。



【プロフィール】ギヨーム・ジャンメール：博士（言語科学）。韓国語、日本語、言語学を専門とする。翻訳家、高麗大学校（韓国・ソウル）教授（2000～）。フランス語と文学・視聴覚作品の翻訳を教える。2007年にフランス語フランス文学会が刊行した韓国語⇨フランス語辞典の執筆に参加。韓国・日本・カナダでフランス語教育学・翻訳学に関する複数の協会のメンバーとして活動している（日本フランス語教育学会（SJD F）、カナダ翻訳学協会（ACT）など）。研究対象は、外国語としてのフランス語教育学や、文学・視聴覚作品の翻訳。フランス語圏、とりわけケベック文学、アカデミア文学にも関心がある。近年発表した論文に、「20世紀の転換点で…東アジアのアイデンティティ変容および文学変容のなかの翻訳・書字」（*Meta*, 64, 3, 2019）、「〈静かなる革命〉をめぐるケベック文学の翻訳について」（*Neohelicon*, 47, 1, 2020）がある。翻訳に、全鏡潁（チョン・ギョニン）『私の生涯で一日だけの特別な日』（*Un minimum d'amour*, L'Atelier des Cahiers, 2021）がある。